



星野律子さん・星野政夫さん

谷戸町在住／50歳代、60歳代

理が全くできなかったのよ。だから料理はお父さんがしてくれたの」と律子さん。

子どもが生まれてからもそれは変わらず、むしろより一層、夫婦で協力しあうようになりました。

「お父さんの方が子どもと接する時間が多かったの。娘はお父さん子で、別れを嫌がって泣くものだから、保育園に送って行くのは私、

お迎えはお父さん。自転車に乗せて遊ばせたり、お風呂に入れたりするのもお父さん。子どもの小さい頃の写真を見ると、お父さんと娘の写真が多いのよ」と笑いながら、律さんは話してくれました。

近所とのふれあい

子育てで大変な時期は、店舗を政夫さんに譲ってくれた親父さんが、豆腐づくりを手伝いに来てくれ、近所の人たちも、若い夫婦を何かと気遣い、子どもの面倒もよくみてくれたそうです。

お二人とも揃って「私たちは周囲の人たちにとっても恵まれていた。ありがたいよね。本当に幸せだよ。感謝の気持ちで一杯だよ」と、何度も口にされています。

夫婦の絆

7年前からお店は、昼は豆腐屋、夜は立飲み屋という形態をとっています。京都にある立飲み屋をイメージして、「おいしい豆腐」「おいしい酒」をコンセプトに、律子さんが始めたのです。それと、言うのもお二人の家は、近所の人たちの溜まり場で「お父さんが手料理で皆をもてなし、味の評判もよかったの。お店で出せば、といつてくれたのも友人たちなの」と律子さん。

ところが、頼みの政夫さんが倒れて入院。突然の出来事に、律子さんは、「私がやるしかない」と必死にがんばりました。その甲斐あってか、客が客を呼び、店は大繁盛。その後、政夫さんも無事退院してきました。こうした危機を乗り越えたことが「一人でも生きて行ける」という大きな自信につながったようです。

「好き勝手やってるけど、最後のお伺いは必ずたててるよ。お父さんあってのお母さん」という律子さんだが「お父さんは若くから仕事一筋の人。年齢差もあり考え方に違いもあるか

ら、若い私が仕事上で、気付いたことはしっかり伝えるようにしているの」とも。「周囲が何と言おうと、俺がいいということならば、何をやってもいいよ」という政夫さんの言葉には律子さんへの全幅の信頼がありました。

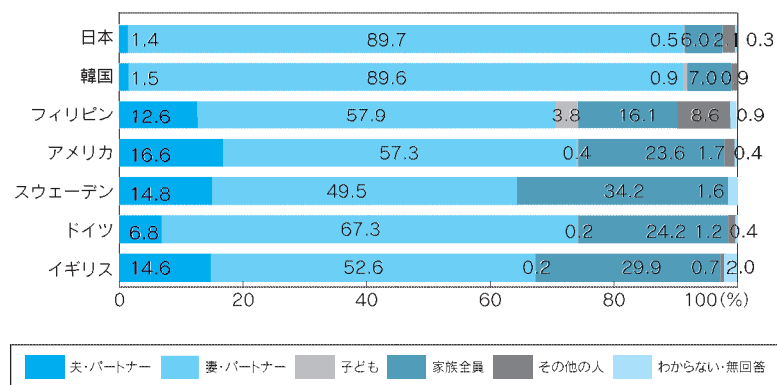
幼なじみから夫婦になり、共に仕事に励んできた長い二人の歲月。男女を越えた絆の深さがありました。

支えあう二人

「お父さん」「お母さん」と親しまれ、賑っている豆腐屋さん。
昭和49年、政夫さんが修業していた三鷹の豆腐屋から独立し、この場所で始めました。
開店直後から、律子さんは政夫さんの手伝いに来ていました。その後、間もなく二人は結婚。豆腐屋の歴史は、政夫さんと律子さん夫婦の歴史とも言えるのです。

結婚当初から政夫さんと律子さんは、お互いを補いあって生活してきました。例えば、仕事では、豆腐づくりは政夫さん、揚げ物づくりは律子さん。家事では、料理は政夫さん、掃除・洗濯は律子さんといったようにです。今ではとても信じられませんが、「結婚当時、私は料

家事分担の状況(食事の支度)(男女計)



【備考】内閣府「男女共同参画社会に関する国際比較調査」(平成14年度)、「男女共同参画社会に関する世論調査」(平成14年7月)より作成。

【平成15年版】男女共同参画白書より